街道小話　３２　　臭いが薄い

街道を歩いているとその街道毎の臭いがあり段々判ってくる。
大きな街道は、臭いが強く街道を外れるとおやーと思う。東海道や中山道は代表的なもので、街道を外れる心配は少ない。

そんな大街道は例外で、普通の街道は、「よく見れば繋がっている」状態が多い。その感じをつかむまでが時間がかかる。歩き始めの時間帯は、おしゃべりも程々にして街道探しに集中しよう。慣れてくれば大丈夫で足が自然と前に行くが、日にちが変わったり別の街道になったりするとまた一から街道探しだ。
同じ街道に思っていても急に道が折れたり、大きな町を通過したりする時は本当は街道が変わっていることが多いので気をつけよう。
それと街道は同じはずなのだが、峠を越せばガラリと雰囲気が変わることがある。府県境を越える時がそれで、今まであった案内標識が無くなったり、道の整備が歴然と違って面食らう時もある。

街道は繋がっているはずだし、どこかにあるはずなのだが、どうも臭いが薄い街道がある。あまり使われなくなった街道でもそれなりに臭いがあるのだが、本当にあったのと思うそんな街道の共通項を発見した。

よく知られている街道では、大阪の「京街道」、島根の「山陰道」、滋賀の「西近江路」などがある。山陰道などは山と海に挟まれたところだからその間の何処かにあるはずなのだが、どうも臭いが薄い。それでも途中の町では街道がはっきりするのに、町を過ぎれば臭いが薄い。

「昔は使われていたが、今は道路が出来て当時の道を人が通らなくなったから」と考えていたがそうではなかった。
「元々あまり利用していない街道」なのだ。元々臭いが薄い街道なのだ。
京街道は京と大阪を結ぶ大事な街道だが、実は大阪と京都を結ぶもう一つの別の方法があった。淀川の水運・船を利用する交通手段があったのだ。人もそうだが、重い荷物などは船の方に軍配があがる。船の発着する途中の町では町としての道が出来るが、町を外れれば又船を利用するのだ。

現在、街道が話題になり、一方昔の船はあまり取り上げられないので街道ばかりに目が行く。日本海側にある山陰道や、琵琶湖に面する西近江路などは、川以上に船が使われたので、その分街道は臭いが薄い。
海・川近くの街道を知ろうと思えば、船もセットで見なければ道は繋がらない。